

Title	陽明文庫蔵「道書類」の紹介(十): 弁長作『念仏往生修行門』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2011
Jtitle	三田國文 No.54 (2011. 12) ,p.37- 46
JaLC DOI	10.14991/002.20111200-0037
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20111200-0037">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20111200-0037</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 陽明文庫蔵「道書類」の紹介(十)

——弁長作『念仏往生修行門』翻刻・略解題——

恋田 知子

前号に続き、陽明文庫蔵「道書類」のうち、『念仏往生修行門』を紹介する。これまでも述べたように、陽明文庫蔵「道書類」は、仮名法語を中心に、あわせて十八種類の書物が一括されたものであり、慶長・元和年間（一五九六—一六二四）の奥書を有するものが含まれていることや、とりたてて書写時期の異なるものも見えないことなどから、おそらく同じ時期に書写された書物群と推察される<sup>1)</sup>。

本書は、内容・奥書から、浄土宗鎮西派の祖、弁長（一一六二—一二三八）作『念仏往生修行門』の元和七年（一六二一）の写しと判断される。『念仏往生修行門』については、周知のように、『法然上人行状絵図』（以下、四十八巻伝）巻四十六に、聖光房弁長制作の書物として大意が記されるものの、これまでのところ現存は確認されておらず、散逸とされてきた幻の書物である。

浄土宗第二祖の弁長は、字を弁阿、房号を聖光房とし、もと天台僧であったが、都で称名念仏を説く法然に教えを請い、その後故郷筑前に戻り、法然相伝の教えを広め、鎮西義の一派を確立した。その著述も、『念仏名義集』や『念仏三心要集』、

『浄土宗要集』など数多く伝存している。法然相伝の三心具足の心得を中心に三心の重要性を説いた『念仏往生修行門』は、四十八巻伝をはじめ、『聖光上人伝』、『帰命本願抄』、『円光大師行状画図翼賛』、『筑後善導寺誌』などにも書名が認められる。だが、四十八巻伝の記事以上に詳しいものはなく、いずれも四十八巻伝によったとみなされる。また、四十八巻伝に記された大意についても、『念仏三心要集』などの弁長の法語内容に共通しており、先行研究によつては、本書の存在そのものを疑問視する意見もあった<sup>2)</sup>。しかしながら、この度の発見により、本作品の存在が明確となったわけである。

試みに、本書（陽明）と四十八巻伝（勅伝）の記事との対応箇所を示すと、以下のとおりである。<sup>3)</sup>

◎陽明本五丁裏一一行目〜七丁表一一行目

陽明 この世の中のねんふつしや上人の御しゆとは申あいて侍れとも、上人

勅伝 世の中の念仏者 故上人の御流 とは申あひて侍れとも、上人

陽明 の御きにはつやく、あらさし事ともあまた申みたれ侍ることこそ

勅伝 の御義には なかりしことゝもを 申みたり侍 こそ

陽明 ぶひんのしたいに侍れ。こ上人へんあにおしへたまふはせんたうの心は  
勅伝 不便の次第に侍れ。故上人弁阿にをしへ給しは善導の御心は  
陽明 しやうとへまいらんとおもはん人はかならず三しんをくしてねんふつを  
勅伝 浄土へまいらむと思はむ人はかならず三心具足して念仏を  
陽明 申へきなり。三しんとは一にはししやうしん、二にはしんく、三には  
勅伝 申へきなり。  
陽明 多かうほつくわんしんなり。一にししやうしんといふまことしく  
勅伝 一に至誠心と云はまことしく  
陽明 わうしやうせんと思ひとりてねん佛をししやうしんとは申侍なり。  
勅伝 往生せんとおもひとりて念仏を 申也。  
陽明 させるへつのやうなとあるへつのくそくの入にもあらず。ちゑさいかく  
勅伝 のゆへにもなし。たゞいつわりかさりて人めはかりの申やうさうとく  
陽明 こけのねんふつと申なり。しん中にならずわうしやうせんと思ひて  
勅伝 申はししやうしんくしたるへし。二にしんくといふは露はかりも  
陽明 二に深心と云は  
勅伝 ねんふつ□うたかふ心なくけつとしてわうしやうせんする、さやうと  
陽明 おもひとりて、又我身はこれむこのさいあくしやうしのほんふなり。  
勅伝 我身は 罪惡生死の凡夫なり。  
陽明 けつちやうとしてちこくにたすへきことをひやとうなきやうこうとくわ  
勅伝 になんせる身なり。いかなるせんこんをはけむともさらにうたかふへき

勅伝 やもなき身なりとおもひしるへし。しかるにみたかくわう大せんひ  
陽明 しかるに弥陀の本  
勅伝 くだんのかたしけなきによつてこのねんふつをつとめいたらんはしんに  
陽明 願のかたしけなきによりて  
勅伝 のちのあくこふほんなう一々にせうめつしてかならずしやうしゆのれん  
陽明 たいにさせん事はまりなきよろこひかなとふかく思ひとりてこのねん  
勅伝 この念  
陽明 ふつよりほかに我身のたやすくたすかるへきことはつやく／＼なしと  
勅伝 仏より外に我身の たすかるへきこと なしと  
陽明 かたくしんするをもつてしんしんと申也。へつのようなきなり。三  
勅伝 かたく信するを 申也。 三に  
陽明 多かうほつくわんしんといふは、まさしくわうしやうせんと思ひし申  
勅伝 廻向發願心と云は、  
陽明 ねんふつを申なり。またへつのようなく、これはこれたゞ一すちにこく  
勅伝 たゞひとすちに極  
陽明 らくにわか身のまいらん ため なりとおもひたる。  
勅伝 樂に まいらむするための念仏なりと思をいふ也。  
◎陽明本七丁表八行目く七丁裏九行目  
陽明 これをほうねん上人よりならいつたへたてまつりたる三心のしさいに  
勅伝 これを法然上人より習つたへたてまつりたる三心 にて  
陽明 侍る。このほか又へつのやうなきなり。これらもこのむねを心えて  
勅伝 侍る。この外またく別のやうなき也。

陽明 申させ給ふへし。たゞしねんふつのかすかんねんぼうもんと申もんに

勅伝 すゝめていわく、もつはらみたのみやうかうをねんすること一まん二

陽明 まん三まん四まん五万六万七万八万九万十万へんなり。人のこんしやう

勅伝 にしたかいてこの中にいつれにも申へきなり。たゞし故人申られしは

陽明 故上人の仰られ候しは

勅伝 なん女さいけにしてきゝてせけんにかへられてそのいとまなからん人は

陽明 在家 のいとまなからむ人は

勅伝 一まんへんなどを申へし。又さいけなりともそのいとまうちありて心

陽明 一万二万などを申へし。

勅伝 さしふかゝらん人は三四五まんへんなど申へきなり。又そうやあまなど

陽明 僧尼なむととて

勅伝 のさまを たらんししにはすくなからんちやう三まんないし五万六万

陽明 さまをかへたらむししには 三万 六万

勅伝 へんを申へし。このほかおほく申さんとおもわん人は七八まんもしは

陽明 なむを申へし。

勅伝 九十まんいかにもくおほく申にすぎたるほうもんはあるへからず。

陽明 いかにも おほく申すにすぎたる法 門はあるへからず。

勅伝

陽明

勅伝

陽明

勅伝

陽明

勅伝

陽明

勅伝 信をとりぬれば自然に三心は具足して往生するぞとやすく

陽明 とほうねん上人は仰られ侍しなり。

勅伝 と 仰られ侍しなり。

陽明

勅伝

陽明

勅伝

陽明

勅伝

陽明

勅伝

陽明

勅伝

陽明

勅伝

陽明

勅伝

陽明

勅伝

陽明

勅伝

陽明

勅伝

◎陽明本一二二表六行目〜一二二表二二行目

陽明 もしこれならわぬことをもならひたるといひ、ほうねん上人の仰られぬ  
勅伝 もしこれならはぬことを ならいたりといひ、 仰られぬ  
陽明 ことをもおほせられたると申てひかめるやうにて人のためにはくろを  
勅伝 ことを 仰られたりと  
陽明 も申物ならば三世のしよふつ十はうのほきつことに たのみたてまつる  
勅伝 申侍らは三世の諸 仏 十方 の菩薩 ことにはたのみたてまつる  
陽明 ところのしやかあみたくわんおんせいしせん道しやうりうねんふつしゆ  
勅伝 所の尺 迦 弥陀 觀 音 勢 至 善 導 聖 靈 念 仏 守  
陽明 こほんでん大しやくの御あわれみなくしてけんせこしやうかなはぬ身と  
勅伝 護の梵天 帝 尺等の御あはれみなくして現 世 後 世かなはぬ身と  
陽明 なり侍らん。  
勅伝 なり侍らむ。已上 略抄 上人人口決の次第言言嚴重なり。

以上、四十八卷伝所引記事との対応が認められ、末尾に「略抄」とあるように、四十八卷伝が『念仏往生修行門』から重要な箇所を略述した様子がうかがい知れる。勿論、弁長作の原本から本書にいたるまで何段階もの書写を経ており、文意の通らない部分もある。また、本書七丁表三行目から七丁裏一行目の記事については、続く八丁表一行目から八丁裏十一行目と重複しており、衍文とみなされる。だが、やはりこれまで散逸とさ

れてきた本作品の存在を確定づける点で、極めて重要かつ貴重な一本と言える。なお、書誌については、以下のとおりである。

- ・函架番号 近ト72へ
- ・形態 写本。一冊。仮綴。
- ・寸法 縦三一・六糎。横二三・六糎。
- ・表紙 本文表紙共紙。楮紙。
- ・丁数 墨付一三丁。
- ・本文 半葉一二行。漢字平仮名交じり。字高約二五糎。
- ・外題 なし。
- ・内題 「ねんふつわうしやうしゆきやうもん」

・奥書 「元和七年九月十日これをうつし候。かなつかいもわろく候へともほんのまゝかき申候。八十あまりの筆にて候まゝ、皆々御らんし候人々御わらい候はんすれとも、もしは念佛一へんも御たむけ候はんかともかすみふてもかなひ候はねともかきをき申候。」

・印記 一丁表右上に「陽明蔵」の朱額形印あり。翻刻に際して本文は底本に忠実を期したが、私に句読点を打つなど、読解の便宜をはかった。また、虫損等により判読不能な箇所については□と表記した。

#### 注

- (1) 陽明文庫蔵「道書類」の詳細については、『三田國文』連載の翻刻紹介のほか、拙稿「室町期の往生伝と草子―真盛上人伝関連新出資料をめぐって―」（『唱導文学研究』第六集 三弥井書店 二〇〇八年）、拙稿「説法・法談のヲコ絵―『幻中草打画』の諸本―」（『仏と女の室町 物語草子論』笠間書院 二〇〇八年）、拙稿「比丘尼

御所文化とお伽草子―窓塚物語―をめぐって」（徳田和夫氏編『お伽草子 百花繚乱』笠間書院 二〇〇八年）を参照されたい。

- (2) 『念仏往生修行門』について、『念仏三心要集』とみなした青柳英珊氏の見解（『鎮西上人』教学週報社 一九三二年）に対し、小西存祐氏は向阿の『帰命本願抄』に『念仏三心要集』と並列されていることから、本作品を『念仏三心要集』の姉妹編のごときものと想定された（『国師の著作』（柴田玄鳳編『三上人の研究』三上人遠忌事務局 一九三五年）。『佛教学総合研究所編『浄土教典籍目録』（二〇一年）参照。

- (3) 四十八巻伝の引用については、小松茂美氏編『法然上人絵伝』（続日本絵巻大成 中央公論社）所収の影印によった。

#### 【附記】

本書の閲覧ならび翻刻の御許可を賜った、財団法人陽明文庫に深く感謝申し上げる。また、本書の翻刻・考察に際して、御教示賜った、陽明文庫文庫長名和修先生に、心より御礼申し上げます。

なお、本稿は科学研究費補助金 若手研究(B)（課題番号二二七二〇〇九〇）による研究成果の一部である。

#### 【翻刻】

ねんふつわうしやうしゆきやうもんざくしやへんあ  
それねふつ申てしやうとにわうしやうせんときさし

あらん人は、このしたいをよくく、心えてね佛を申へきなり。しやうとをいつる事はきはめたる大しなり。わうしやうこくらくによりてそ、この世の人のためにやすき事も侍へき。わうしやうこくらくは、ねんふつによつてそ、いまのまんせの

つみふかきともからの身にたえたるきやうなる。そのゆへは、しやか如らいつてかたくして□させ給ふてみぬるとき給ふに、このしやはせかいのむかいむさんのうかみかたきを、せめてもそかへんためにときたまへるみぬりの中に、しやうとものきやうほうふかききなるといへる、しやうとの三ふきやうのなかに、ねんふつ申てわうしやうすへしといへることをあかしたまへり。このみぬりをたのみてしやうとものんにいりてねん(1才)ふつをふかくしんすへきなり。ほとけと申たてまつるもあはれみふかくおはします。しひのあるしのおしへをきたまへるねん佛のほうもんなり。しかるを、たいたうかんとにせんとおしやうと申たてまつりし大し、まつせのなりくたれるとき、つみははやましにつもり、世中はたゞくたりにくたりて、せんには日々にしりそき、あくには夜々にすゝみて、十あく五きやくをつくりて、むけむ地こくにしつみ、三あく道のすもりあるしにならんとする、しゆしやうをあはれみて、まつほうのはじめに世に出させたまいて、何事をこんきやうすとも、たゞ我おしへをふかくしんして、ねんふつの一きやうえかうをつとめとして、まい日のしよさには、あるいはまん二まん三まん四まん五まん六まん七まん八まん十まんへんなど申て、あさ夕おもひをこくらくにかけ、心をかたちにすましてたのみをみたにあさからすねん仏(1ウ)をはしめてのちよりのちおはるまておこたることなくよくくつとむ人は、かならずわうしやううたかきなきなり。ふかくせんたうをたのみたてまつり、そのおしへをしんすへきなり。いかゞしんするとならば、わかてうあきつしまひゑんほうとうるんくろたにほうねん上人の御おしへに、心わくけんくうらうせうなりしとき、みまさかのくにほたいたたくけう御はうにしたかいたてまつりて、そのゝちくろたに上人をしとたのみたてまつりて、しゆく

のほうもんをならひて、此たひしやうし出さらむ事をなげき申せしかとも、我身にたへてつとむへききやうなかりしかは、なげきかなしみて、この身をいかゞせんとおもひ、うつもれてしころのししやうはしやうしいつへき事とおしへたまはず。しかれば世の中にしやうし出ることをおしたる人やあるとて、わらくつしはりはきてふりおひかた(2才)にかけ、とうさいにはしりめぐり、なんきやうほうつ京にちへきはめたまへりときこえし人々に、いかにしてこのたひしやうとをはなるへきとたつねたてまつりしかとも、これこそしやうしはなるへききやうよとけにくしくおもゆる人なかりしかは、いかにせんとかなしみて身をいたつらになし、この世をむなしくすくしてはうれへるへき事かなとかなしみのなみたをたれて、くわおんくくのそのかみよりかくのごとくむなしくすくしてけり。又この世をむなしくおくりなは、大ちひむしゆこふもはるかなるへきことかなとかなしみて三世にわつらい一しんにくるしまん事を思ひめぐらすに、なみたもとゝまらずおほえて、さりとてやむへき事ならずとて、くろたにのほうおんさうと申へききやうさうも入こもりて、一さいきやうをひらきて我身にをこないてこのたひしやうしをいつへきほうやましますと見侍りしほとに、もろこしにせんたうおしやうと申たてまつるれば、ちやうあんしやうらくやうのみやこかうそくまうていよりはしめたてまつりて、くさ木のかせになひくかこくねんふつをすゝめたてまつりて、しやうとのほうもんをつくりおきたまへる御しよのありけるを見いたして、我らはこれ十あく五きやくのあく人也。かゝるあくこうしんちうの物のために、せん道おしやうの御おしへにねんふつ申てわうしやうすへしとあること、こせちよくせの我らか身にたへたるつとめにてあるへかりけれと見さためおよひて侍り

とのたまへり。しかれば、これをこの世の人はふかくしんしてかならず一かうせんしゆほんくわんわうしやうのねんふつを申へし、うたかないなきこと也とひろめさせたまふよしかをきもおもひてこの小そうへんあはそのかみてん大のおしへをならひろんきもんにかたとりてふつほうをいとなみあかしらし侍りしほとに、したしきとうほうのとさうとかや申やまいを□るより□るまで

わつらひて、さるのときはかりにえいりして、ひとすすまていきも出すさりしを見侍りしに、なみたもとゝまらさりしかは、とし比ならひたりしろんきのもんともとりをきて、ひとへにくらくを心さしてしゆくゝのつとめして一このおわりにかならずしやうとへわたらんと心さしふかく侍りしあいた、さん上にてかくもんせしそのかみ後のよをいとなみ給ふ上人の御なかに、ひゑさんほうとうゑんくろたにの上人ほうねんの御はうと申人こそちへほからかにして後世の道をは教

あまた人にもといきゝみつからも一さいきやうさうに入こもりて一さいきやうをみきはめたまふ事あまたたひあるなれ。そのきやうの中にとりてしやうとの三ふきやうの中にあみたきやうと申かきやうとし、ろんのなかにてんしんほさつのつくりたまへるしやうとろんを我ろんとし、大たうのたいしの事にはせんたうおしやうをわかしたてまつりて、くきやうかつこうしてしやうとのつとめ一すちに一かうせんしゆのあみたふつこそめてたきありかたきわうしやうこくらくのきやうとはなり侍るなれとて、ゑんをむすひたてまつらんと思ひしあひた、きやうしゑまいらせ侍へきをことにそのきこえひろくなりたまへるにうたう上人なむあみたふつと申てかたしけなくゝたまひしひしり、ほうねん上人をしやうしたてまつりて大佛てんのはんさくの木下をたうちやとしつらいて、十六さうくわんのたう

のまへしやうとの三ふきやうせんたうおしやうの御ゑいあはせて三かてうのせんほうをねんふつをもつてしやくしをかいにしなるのみやくこくらくしとう大しのちしやともかしらそいつゝみて、大しゆにたちなるかおのゝちやうもんしてなみたをなかしあわれみたつとみたてまつりて、あるひはすいきのきはまりなく

此たうしは我てう日本こくの人はおほえず、さうらいしんら大たうのしやう人か、あるひは大こんのほさつのけしんかとあやしみたつとみのゝしるほとこそあれ、ならのきやうおしなへていらのきやうさまにちへある人の物をきくをよくるちやうそうそくをいわすゆゝしくたつとみたてまつりしほとに、きた山のかた大はらと申所はみやこといひ、まことに後世をおもふ人々ろうきよしたまへるところなり。かの所にてん大さすちうなこんほういんけんしんの御はうとてほとけかと申人のおはせしか、とう大しの上人をよひたてまつりてつかいとしてほうねん上人をしやうしたてまつりて、ねんふつほうもんをよくゝたんして、たつとくめてたく侍る事なりとていまよりいこ一かうにねんふつにきしたてまつらんとてしたしきしゆうのきやうをすてゝ、たゝ一すちにねんふつを申させたまいき。これよりのちはゆめゝうたかふ人あるへからす。我てうにはさすかけんしんとけんくう上人とたんしたまいて、まんせ

させんかためにひろめたまへるねんふつのほうもんなるを、いつれの人かほんいをいたし、うたかいをなすへきや。もしきはうのどもからあらはふかくおもふへし。一にはくちのいたり、二にはけたうのしよい也とてきやうたうねんふつしたまふへき。これこそ我てうの一かうせんしゆのねん佛のはしめなりけれ。このよしをきゝおよひて、ほうねん上人おしやうしたてまつりて、さかのみとやうつまさにむわいぢきよ水

なんにてこそせんしゆのねんふつぼうもんをとかせまいらせ、これほと  
たつときも何事といふとも侍らしとのゝしりあへるほとに、九てう殿」(5才)

くわさんのみん殿、とく大し殿、かゝるやことなくちへかしく  
おはしますとのゝ、ねんふつもんにいらせたまふあひた、我もく、  
おとらしまけしときせんねんふつにいらせ給ふよし、こ

の小そうへんあはきゝつたへて、しやう人のよしみつといかにかとむま  
のときはかりにとひたてまつりて、たゝしはしと思ひしほとに  
ひつしのときはかりまで、上人もこたへみつからもむかいたてまつり  
てうけたまはり、おもふになみたもとゝまらず、あはれにたとくお  
ほえ侍りしかは、そのつきの日より上人にしたかいたてまつり

て、しら川のほとりにさうあんをむすひて、あさ夕しやう人の御あん  
しつをすみかとしてならひつたへ侍る、一かうせんしゆのねん  
ふつなる。しかるに、この世の中のねんふつしやこ上人

の御しゆとは申あいて侍れども、上人の御きにはつやくくあら  
さりし事ともあまた申みたれ侍ることこそふひんのした  
」(5ウ)

いに侍れ。こ上人へんあにおしへたまふは、せんたうの心はしやうとへま  
いらんとおもはん人はかならず三しんをくしてねんふつを申へ  
きなり。三しんとは一にはししやうしん、二にはしんく、三には多かう  
ほつくわんしんなり。一にししやうしんといふまことしくわうしやう

せんと思ひとりてねん佛をししやうしんとは申侍なり。させるへつ  
のやうなとあるへつのかそくの入にもあらず。ちゑさいかくのゆへ  
にもなし。たゝいつわりかさりて人めはかりの申やうさうとく

こけのねんふつと申なり。しん中にならずわうしやうせんと思ひ  
て申はししやうしんくしたるへし。二にしんくといふは露はかりも  
ねんふつ□うたかふ心なくけつとしてわうしやうせんする、さやう

とおもひとりて、又我身はこれむこくのさいあくしやうしのほんふ  
なり。けつちやうとしてちこくにたすへきことをひやとう  
なきやうこうとくわになんせる身なり。いかなるせんこんを

はけむともさらにうたかふへき、やもなき身なりとおもひしる  
へし。しかるにみたかくわう大せんひくわんのかたしけなきによつ  
て、このねんふつをつとめいたらは、しせんのにちのあくこふほん

なう一々にせうめつして、かならずしやうしゆのれんたいにさせん  
事きはまりなきよろこひかなとふかく思ひとりて、このねん  
ふつよりほかに我身のたやすくたすかるへきことは、つやくくなし  
とかたくしんするをもつてしんしんと申也。へつのようななき

なり。三ゑかうほつくわんしんといふは、まさしくわうしやう  
せんと心さし申ねんふつを申なり。またへつのようなく、これ  
はこれたゝ一すちにくらくにわか身のまいらんだめなりとおもひ

たる。これを多かうほつくわんしんといふ也。せんするところこの世  
をいふをもつてししやうしんといひ、ねんふつをたつときこと  
なりとしんするをもて、しんしんといひて、こくらくをねかふをもつ

て多かうほつくわんしんといふなり。ゑとをいとわすしてしやうとを  
もとめは、ともつなをとらすしてふねをこくかことし。ねんふつ  
をしんせすしてわうしやうをこふるは、くらき道にとほし火を  
けしたるかことしといへり。これをくしるをせんたうおしやうの

三しんとは申なり。これをほうねん上人よりならいつたへたてま  
つりたる三心のしさいに侍る。このほか又へつどのやうなきなり。

くれくもこのむねを心えて申させ給ふへし。たゝしねんふつ  
のかずはかんねんほうもんと申もんにすゝめていわく、もつ  
はらみたのみやうかうをねんすること一まん二まん三まん四まん

」(7才)



五万六万七万八万九万十万人なり。人のこんしやうにしたかいてこの中にいつれにも申へきなり。たゞし上人仰られしは、

なん女さいけにしてきゝてせけんにかへられてそのいとまなからん人は一まんへんなどを申へし。又さいけなりともそのいとまうちあり

て心さしふかゝらん人は三四五まんへんなど申へきなり。このほかおほくのさまをたらんしにはすくなからん、ちやう三まんないし五万

六万へんを申へし。このほかおほく申さんとおもわん人は七八まんもしは九十まんいかにもくおほく申にすぎたるほうもんはある

へからず。たゞしないし十ねんといひ、もしは三ねん五ねんふつらいかうともあかし、一ねんしやうしをそくとくわうしやうものへたるは一し

やうさうあくのともからのねんふつといふ事とうち物にしてあやまでこれをきけはれうかなはず物あしくうちかみと  
〔以下、8ウ11行目まで重複〕

しやうしんといひ、ねんふつをたつときことなりとしんするをもつてしんしんといひ、こくらくをねかふをもつて急かうほつ

くわんしんといふ也。急をいとほすしてしやうとをもとめはともつなをとかすしてふねをこくかとし。ねんふつをしせすしてわう

しやうをするはくらき道にとほし火をけたるかことしといへり。これおのくしるをせんたうおしやうの三しんとは申なり。これを法

ねん上人よりならひつたへたてまつりたる三心のしさいに侍る。此ほか又へつのやうなき也。くれくもこのむねを心えて申させ給ふへし。

たゞしねんふつのかすはくわんねんほうもんと申もんにすゝめていわく、もつはらみただのみやうかうをねんすること一まん二まん三

まん四まん五まん六まん七まん八まん九まん十まんへんなり。人のこんしやうにしたかいてこのうちにいつれにも申へきなり。

〔8才〕

たゞし故上人おほせられしは、なん女さいけにして思ひきらふそのいとまなからん人は一まんへんなどを申へし。又さいけなりとも

そのいとまうちありて心さしふかゝらん人は三四五まんへんなど申へきなり。又そうやあまなどのさまをかへたらんしにはすく

なからん、ちやう三まんないし五六まんへんを申へし。このほかおほく申さんとおもわん人は七八まんもしは九十まんいかにもくおほく

申にすぎたるほうもんはあるへからず。たゞしないし十ねんといひ、もしは三ねん五ねんふつらいかうともあかし一ねんしやう

しをそくとくわうしやうものへたるは一しやうさうあくのともからのねんふつといふ事とうち物にしてあやまでこれをきけは、れう

かなはず物あしくうちかみとかんなどいふ人のさいこりんしゆのときせんちしきのすゝめによてかくのごとくならひて、そのうち  
やかてあくをつくらておわるにいたての事也。ねんなどなつて

ててかひ南無阿弥陀佛と申てその、ちもしは十ねん廿ねんかあひたしんまんこふ四あくせつしやうちうたうをことし、我は此一ねん

をとなへたりしかは、わうしやうせんするそといひたらん事これかほしんすへき下かふてそうやあまをすゝめ給ふちやう三まんへん

申せと上人のたまひし也。しからはせん道のしやくにいわく、あるいは三万六万を急しはみなこれ上ほんししやうの人なりとしかれは

すなはちおなじくは上ほんししやうを心さして申へきなり。かやうにしるし申斗はねん佛のきを人にかへていひみたすあひた十

人は十にへんして百人はひやくきゝて人をまとわすなり。たゞしひとへにねんふつをやめんためけたうのしよい也。たゞし古上人は

世にやすくこそねん佛をはかみそんにおしへたまひしか、されはこそ  
くにくよりまいりてねんふつをうけたてまつりつる人々も

〔9才〕

心やすくおもひ侍しことなり。いわんや大はらの松おしやう御をう  
ほとこのやことなまぢしやもまことにめてたかりける事かな

さけをはせさせたまいし事なり。このむねを心えん人々は世に  
やすくおもふへきことなり。たゝせんするところこのねん佛はけつ  
ちやうわうしやうのきやうなりとしんをとりつればしねんに三心  
はくしてわうしやうするなど、やすくゝとほうねん上人は仰られ侍し  
なり。かやうに思ひとりてたゝねんふつの数おほく六七万へんも申人は  
百人ながらわうしやうすることうたかないし。せん道もしやくせ  
させたまへりとして、ほうねん上人は日へつにつとめに七まんへんを申  
たまいきはこたにのあまこせんは十万へん申させたまいしを世の中  
のたつとき人なり。ありかたき事にせさせたまいしなり。この

「(9ウ)

世の中の人のねふつにはたゝねんなどといひて人をいたつらに  
なす事ふひんことに侍れ。又ねん佛をうたかへはこそつみ  
をはつくらさめといひ、なやましてもとよりはかくゝしくは  
なきつみことをいよくゝあくこふふかき物にすゝめなすこと

のあさましき三しんをまやうゝおしへなしてかいしやくかま  
しくちしやのふるまいすることむけまされる心也。ねんふつの  
きをくきりやうにはいわしなんといひて心にくかほにことあり  
かほなることむこくのきやくさいなり。これていのことゝよをさう  
とくこけの人とはなつくる也。又めてたき事ありとて人にはかくれ  
へたつるなどいひて心さしある人にはせいもんきしやうをかゝせてゆる  
すなどいふ。さることやあるへきせんたうおほくのふみをつくり

たまいてしやうとしようとなつてまつせのいかならん人もわうしやう  
心さしあらん人はこれによりてしやうしをはなれ、しやうとへま  
いれとてひろめおしへおきたまへる。ほうねん上人はなんほく二きやう  
「(10オ)

のそこはくのちしやくやきせんらくせうにしてのゝしりひろ  
めたまへるねふつわうしやうのほうもん也。ほとけはこれらの人をかきらい  
いつれの物をかきらいたまへる、たゝはうしゆしやうをしつかはねん  
ふつをしんしてこくらくへまいれと仰られたるに、たれかは十万より  
ほかの人まできらいへたてたるへきや。させる人にかくすなどいふ事は  
しんこんと申ほうもんこそみつけうなと申れ。又るんぎの

中にこそめてたきひきなと申斗も侍れ。まことにいまこれねん  
ふつと申はまつ代あくせのこのころむにんむさんのなん女くちむち  
のあまや入道のいかにしてもしやうしをはなるへきやうもみえぬ物を  
あわれみたまいて、大たう上人せんたうおしやうねんふつゝわんしんの「(10ウ)

ふみをつくらせたまいてこれをすゝめ給ふ。我てうほうねん上人はこんと  
しやうしをはなれん事をいかゝせんとなげきかなしみ給  
いてみいたしたまへるほうもんなるを我ごとくにしやうしを  
出よとまんせのしよ人はたゝ一すちに思ひとりてせん道の御すゝめ  
のねんふつを申をこそ人をきらはすおしへたまへることなれ。又物の  
かすならねともこのこそうへんあもまんせのあま入道むかひむ  
さんのなん女けたうむこくのともからなりとも、まことしく思ひ  
とりて、わうしやうねかわん人はかくのことくのしたいを心へてこほう  
ねん上人の御すゝめをしんして、ねんふつのかすをほからかに  
申て、りんしゆしやうねんわうしやうこくらくと心さし給へど、はるゝ  
とつたへをき侍らんとためにいきをしるし申ところなり。しよせん  
まつせの人々よくゝしんすへし。せん道はそれたれぞや、すな  
わちさいほうこくらくのけうしゆあみた佛まつせのほんふの  
きにさうおうしたまわんために、人とけんしてかりにせん道  
と申なつき給へる。一さいのわれらることきの一しやうさうあくのと

「(11オ)

からを、おやの子をおもふことくあはれみたまはんかために、このなん  
きんふたいにいてたまいて、くわんきやうのしよならひにおほくの  
ねんふつのくわんしんのふみとかをけんさいにせうするを急て  
つくりきたたまへり。しやうとしようをたてたまふに、大たうもろこし

まてはおほくの人をりやくしたまいて、かりにわうしやうのよしをしめして  
日本こくにわたりては、ほうねん上人とあらはれたまへるよし、やんこと  
なきちしやたちあまたかしこく人のせいきよにゆめのつけ  
そのかすきこえたまへり。御ごととなりたやすくほめもそしりも  
したてまつるへきにおよはぬ事也。ひとへにこくらくのあみたほとけ」(11ウ)

おはしませる事なれば、あらたにこくらくわうしやうせんと  
心さしあらん人は、ふかくかのつたへをまさになもちてしんすへき也。  
しかればすなはち、こくらくにてはあみた、大たうにてはせんたう、

我てうにてはほうねん上人といはれたまへり。さらにしりぬ三しやう  
一心にして三こふのねん佛をすゝめたまへりといふことをふかくしん  
して、一すちにねんふつおこたるなるかへし。もしこれならわぬことを

もならひたるといひ、ほうねん上人の仰らぬことをもおほせられ  
たと申てひかめるやうにて人のためにはくろをも申物ならば  
三世のしよふつ十はうのほさつことにたのみたてまつるところ

のしやかあみたくわんおんせいしせん道しやうりうねんふつしゆこ  
ほんてん大しやくの御あわれみなくしてけんせこしやうかなはぬ身と  
なり侍らん。まんせむちの人をあわれみてその時をまといしたてまつらし」(12オ)

とてかやうしるしおくところなり。ゆめくうたかきをなす事  
なくして、ねんふつの数おほく三四五万へんなとかけてりんしう

しやうねんわうしやうこくらくとねかいたまはん人々は、うたかきなき  
わうしやう人にておはしますすへきなり。これみたのほんくわんにも

かなひ、せん道御あはれみにもさうおかし、ほうねん上人の心にも  
かなひ給ふへし。日本こくのちしやと申大はらのおしやうの

かうやのそうつ御はうのことくの人々はみな六万へんなり。こほう  
ねん上人の御はうははしめは六まんへん後には七万へんなり。せ  
けんにのゝしりたまへるやんことなき人々はみなかすをとりてねん  
ふつ申てりんしうをいのり給ふなり。世にきこえぬ物も□とう

とりんしうをいのらすともたてつるは、くちのいたりふたうのおこり  
いにしへもそむき人々にぬきやうはらのことそてんまのくるはし  
まぞんのしよいなり。はなはたみゝにきゝ入す、よくくこゝろ  
をしつめてあんすへし。わうしやうほとの大しにおもひかゝるはかりの  
人のむなしくねふりいて、我はこれねんの物なれん。わうしやう  
うたかきなき身なりといふ事、まことしからぬ事なり。」(12ウ)

元和七年九月十日これをうつし候。かなつかいもわろく候へともほんのまゝ  
かき申候。八十あまりの筆にて候まゝ、皆々御らんし候  
人々御わらい候はんすれとも、もしは念佛一へんも御たむけ  
候はんかともかすみふてもかなひ候はねともかきをき申候。」

(13オ)